

近代知としての日本漢文と中国的受容

章 清
陳 力 衛

1. はじめに

歴史的に見て、日中間においていわゆる漢文をもって相互に交流可能な時代が長く続いていた。近代になってからも、当時東アジアにおける知識人の共通項は漢文であった。たとえば明治六年到北京の街に入った日本僧小栗栖香頂は漢文も読め、漢詩も作れた。ただ、いざ実生活に入ると、彼が直面したのは「文字雖同音不同、耳雖不解目能通」という、文字を目でわかっているにもかかわらず会話が理解できない事態であった。一方、近代以降来日した中国人も同じく会話はできなくても文章（漢文）さえ書けば、筆談による交流が可能であった。

同じ漢字文化圏に属する日本人が漢文で書いたり翻訳したりした近代知識は、「数千年にわたって未曾有な変化」に直面していた中国の知識人にとって、世界を知るための不可欠な「知的資源」となった。そして漢文は短時間で新知識を獲得するための有効な手段として用いられた。

「日本は自身の数千年の衣冠を思い切って捨てて西洋の衣冠に換えることができるのに、我が国は二百年の衣冠を捨てて西洋の衣冠に換えることができない。その度量の差はなんと大ききろうか」¹⁾と、清末の思想家である宋恕(1862-1910)が1895年に発したこの言葉は、同時代の読書人の

1) 宋恕「致錢念劬書」1895年7月25日、胡珠生編『宋恕集』上冊、535-536頁、中華書局、1993年

共通認識を代弁していた。かれらは、明治維新を経て凄まじい変化を遂げた日本を知ろうと、いち早くこうした漢文資料に飛びついたわけである。そして日本を最も重要な「鑑」と見なして、「日本を見ならえば、わが国も振興できる」という認識さえ伝わってくる。アメリカ人の研究者ダグラス・R・レイノルズ（Douglas R. Reynolds）は、日本からのこうした影響について、「中国は1898年から1910年までの12年間にわたり、近代化への思想と体制の転換が行われ、大きな成果を収めた。そのプロセスにおいて、日本が中国の手本となり、しかもその積極的な関与がなければ、これらの成果は得られなかった²⁾と指摘した。それについては従来留学生の果たした役割が強調されてきたが、この近代知としての漢文書籍の伝播が清末中国に対する深遠な影響をも重視すべきであろう。

そこで、我々は『近代日本漢文文献叢刊』（章清・陳力衛主編、張明潔・陳捷・陳繼東副主編）の第一輯（28冊、31種）を、原文の影印と解題をつけて上海古籍出版社から2022年末に出版した。「歴史」と「地理」を中心に編集した第一輯は、19世紀以降の代表的な漢文の著書及び刊行物を重点的に選んだ。収録方針は主に以下の4点に基づいている。

- (1). 日本の近代化プロセスに何らかの影響を与える漢文著書。
- (2). 中国知識人の読書体験の中で触れた漢文著書、および中国人の序跋、評論を加えた日本漢籍。
- (3). 日本人が漢訳した近代洋学の著書。
- (4). 日清戦争後に中国向けに漢訳された「実用」類の著書。

近代日本に影響を与えた漢文著書、例えば『日本外史』『近世古談』など多くは自国民向けであるが、同時に中国人が日本を知るための直接的な資料でもある。後述のように清国公使館員の黄遵憲の『日本国志』はこの

2) Douglas R. Reynolds: China, 1898-1912: The Xincheng Revolution and Japan, Harvard University, 1993（任達『新政革命與日本——中国, 1898-1912』7頁、李仲賢訳、江蘇人民出版社、1998年）

ような資料を大量に参照した。また、中国人の序跋、評論を加えた日本漢籍は、当時の日中文化交流の実態を反映している。さらに近代洋学の漢訳、特に「実用」類の著書の翻訳は、まず日本で評判になってから中国に漢訳されたものであり、すべては当時の中国知識人の、知的意欲と密接に関係している。具体的な収録冊数と作品名と解題担当者は以下の通りである。

1-2 日本外史（楽敏）；3-4 国史評林（陳力衛）；5 近古史談 近世史談 近史偶論（陳力衛）；6-8 日本名家經史論存（李華雨，陳捷）；9 鴉片始末 洋外紀略 遠西紀略 隔韓論（章清）；10 尊攘紀事 訂正尊攘紀事補遺（陳捷）；11-12 西洋史記（陳力衛）；13 翻譯米利堅志 法蘭西志（陳捷）；14-15 万国史記（章清）；16 万国通典（喬志航）；17 元明清史略（陳繼東）；18 增補元明清史略（陳繼東）；19 清史攬要 滿清史略（陳捷）；20-21 清朝史略（章清）；22 支那通史（曹南屏）；23 新編東亞三国地志 五大洲志 万国地理課本（張明傑）；24 法越交兵記（張明傑）；25 近世大戦紀略 欧亜風雲録 最近支那史（孫青）；26 大日本維新史 西国新史（曹南屏）；27-28 東洋新報（章清）

本叢書に収録した漢文資料は、これまでの日中文化交流史の研究ではまだ十分に利用されていないものが多い。これらの漢文資料を整理することで、近代日本の方向性や日中文化交流史の諸相について理解を深めることができる。たとえば黄遵憲や梁啓超らの啓蒙思想家の「東学（日本学）」の背景は何であるかをさぐる手がかりなど、中国近代の思想研究のために新たな情報を提供することが可能である。ひいては近代知の伝播という視点から翻訳史や概念史の研究にも多くの基礎資料を提供することができると思う。

二つの文明の交流は、往々にして書籍や雑誌のような出版物に頼って、しかも主に翻訳を通じて行われている。しかし日中間の交流は、近代に入ってから、漢文で書かれた文献を通じて展開できたことは、間違いなく文化交流史の中で非常に特殊な事例である。なぜ漢文を表現の「媒体」

として使うことができたかを理解するには、まずは日本人の漢文使用の歴史を振り返えなければならない。そしてこのような漢文文献が文化交流にどのような影響を及ぼしているかを明らかにする必要があるだろう。

2. 日本漢文の変遷

周知のように、中国には輝かしい古代文明があり、その影響で周辺の朝鮮半島、日本、ベトナムは漢字、漢文を受け入れ、漢文で書くことが知識人の基本教養となった。日本では8世紀に歴史書『古事記』と『日本書紀』、および各地の『風土記』があり、すべて漢文で書かれており、その中の著者はもちろん大陸からの渡来人である可能性もあろう。8世紀末の平安京遷都から10世紀初頭までの百余年間、「国風暗黒時代」と言われるほど漢詩文の栄えた時代でもあった。日本は積極的に唐の文化を取り入れ、『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』などの漢詩文はすべてこの時代の産物である。後に「学問の神」と呼ばれる菅原道真でさえ、主として漢詩漢文の著述を残している。平安時代の高僧円仁が書いた『入唐求法巡礼行記』（838-847）は、現在も当時を反映した中国語口語資料として注目されている。894年に日本が遣唐使の派遣を取りやめて以来、日中間の交流は減少の一途をたどっている。10世紀に入ると、仮名の発明に伴い日本の和文が形成され使用されるようになり、『古今和歌集』の編纂により和歌が再興され、宮廷女流文学も発展し、『源氏物語』『枕草子』などの優れた作品が生まれた。漢文は引き続き正式な文章や歴史記録などに広く用いられている。11世紀から13世紀にかけて、日本の入宋僧の書かれた漢文が主導的な地位を占めはじめ、「五山文学」が反映しているように、すでにプロの集団によって独特の漢文世界を形成し、専門化された傾向を呈している。道元（1200-1253）の『正法眼蔵・正法眼蔵随聞記』という正統に匹敵する漢文著書も現れた。

江戸時代の中期になると、朱子学が日本で盛んになるにつれて、四書五

経などの儒学の基本經典への学習が加速した。「漢学の伝来は遠く上古に在りと雖も、其の最も盛大を極めたる時代は徳川幕府三百年の間とす」と、381 人も漢学者の伝記を収録する『漢学者伝記集成』（1928）の序³⁾に宇野哲人が書いたように、近世では平安前期を凌ぐほどの漢文隆盛の時代を迎えた。特に朱子学に批判的な荻生徂徠は、日本の伝統的な漢文訓読は一種の翻訳であり、同時代の中国語を学ぶことを主張している。なぜなら、そうでなければ朱子学の神髄を本当に理解することはできないと考えているからだ。荻生徂徠は長崎の唐通事岡島冠山を招いて唐話（中国語）を学んでいた。その機運が高まり、元々通商のための通訳に限られていた唐話が、長崎から解放され、近畿や江戸までに波及した。これにより、日本の漢文も文章や修辞などの面で中華と歩調を合わせ、新しいレベルに達した。黄遵憲は『日本雑事詩』（1879）の中で「物茂卿の『徂徠集』、頼子成の『山陽文詩』は、わが国の人で、その名をしらぬものもない。三百年来、古文家の領袖である」と日本人の物茂卿（荻生徂徠）、頼子成（頼山陽）の漢文について高く評価する一方、前者の漢文表現のレベルにも次のように大いに称賛した。

おもうに、日本人は天性文章にたくみなものであろう、物茂卿のいっているように、(文章)をわが(中国の)音で、上から読ませたならば、わが国人になかま入りをすることも、むつかしいとはいえない。朝鮮や安南などは、もんだいにならない⁴⁾。

この中国語学習ブームは同時に文芸にも波及し、中国語の口語を直接学習するほか、白話小説は教材として大量に読まれ、その筋構成と描写手法は日本で消化、吸収された。長崎の唐通事周文次右衛門は、日本語の浄瑠璃脚本『仮名手本忠臣蔵』を白話体の『忠臣蔵演義』に漢訳するようにな

3) 『漢学者伝記集成・序』、関書院、1928 年

4) 黄遵憲著、実藤惠秀・豊田穰訳『日本雑事詩』（東洋文庫 111）、125-126 頁、平凡社、1968 年

り、後に『海外奇談』（1815）に改名して刊行された。面白いことに、同時代の日本人作家山東京伝は、『忠臣蔵演義』と『水滸伝』という二種類の白話テキストを巧みに取り入れ、日本語小説『忠臣水滸伝』（1799）を新たに創作し、より生き生きとした白話的表現と時代の息吹を際立たせた。

中国からのさまざまな書物の刺激を受けて、「近世の漢学者たちは経学だけでなく、同時に、兵学、自然学、歴史・日本史など他の学問をもおこなった」とされるぐらい、広範な分野にわたって漢学が広がりを見せた。⁵⁾いわゆる西洋との接触によって新知識の受容を伴う一連の漢文書物が現れてくるのも至極当然の流れであろう。早くは18世紀の蘭学からの知的受容によって、医学の『解体新書』（1774）をはじめ、本草学の『六物新志』（1786）や物理学の『気海観瀾』（1827）なども同じく漢文で訳されていた。なぜこのような新知識の分野で漢文に訳すか、ということを考えるに当たり、宇野哲人の前説を引き続き引用しておく。

……蘭学はもと医家によりて研究せられしも、幕府の末造之に指を染むる者、屢々漢学者の間に起れり。箕作紫川・大槻磐水の如き、漢学の素養によりて蘭学に進みしもの、安井息軒の如きも、天文地理工技算数に於ては洋学の説く所を取り、その他学者にして之を窺へるもの少なからず。明治初年、中村敬宇能く西洋道德の粹を訳出し、其の説穩健妥当なりしは、其の基礎漢学にありしは世人の周知する所なり。……当時の智識階級に属する者、能く漢学によりて頭脳を鍊磨したれば、遂に西洋文明に接触するも周章狼狽することなく、之を咀嚼し之を消化し、採長補短以て国民をして大勢の趨く所に順応して謬らざるを得しめし也。⁶⁾

要は「漢学の素養」があつて「西洋文明に接触するも周章狼狽することなく、之を咀嚼し之を消化」することができたということである。これぞ

5) 黒住真「漢学—その書記・生成・権威」『近世日本社会と儒教』、ベリかん社、2003年

6) 『漢学者伝記集成・序』、関書院、1928年

漢文の力なり。この伝統は明治中期まで受け継がれていた。

漢文の学習を始め、漢文に対する理解も深まり、日本人の漢文レベルは全体的に向上した。漢文で書く、また漢文に訳す行為そのものは時代的な要請からくるもので、場合によっては一種の格式を重んじた結果である。これはつまり東アジアの知識人の共通の教養に基づく営為として広く認められていたからである。

19世紀半ば、中国がアヘン戦争（1840）に敗れ、またペリーが来航したことで、日本の知識人たちは危機感を抱き、西洋に関する情報を積極的に収集しなければならなくなった。安政二年（1855）の『鴉片始末』、六年（1859）の『隔韓論』はいずれもこのために作られたもので、前者は広く伝えられている漢文の写本であり、後者は塩谷世弘（宕陰）による刊本である。それはアヘン戦争後の中国の現状だけでなく、日本の今後の方向性についても検討し、明確な提案をした。この点について当時の中国人の王韜の賞賛と共感をも博した⁷⁾。

溝口雄三は、アヘン戦争後の中国の窮状あるいは悲劇に対して、中国の研究者の間に認識あるいはシンパシー上の共有があったことを指摘している。「アヘン戦争は、一つ間違えば自らにふりかかった事件であった」ため、「事実幕末の人士の西欧観に与えた影響は甚大であった」という⁸⁾。渡辺浩もまた、「特にアヘン戦争後は、実態の伴わない尊大さの故に自滅する反面教師として中国が描かれるようになる」ため、日本は「西洋から学ぼうとしない、あるいは学ばない他のアジア諸国を蔑視するという構図は、こうしてすでに維新前に成立されていたのである」と述べている⁹⁾。

7) 「嗚呼！母謂日本之無人也。我嘗讀其国近人所著『隔韓論』，皆論我国中外交涉之事，直不啻咨嗟太息以言之，顧猶未若今之已甚也。」「今者泰西通商之局亦大啟乎東瀛，伝教之士盛行於国中。然西人卒不敢挾制凌侮之者何哉？以一切西法無不講求，雖未能奪其所恃，亦已效其所長，而其尤善者，則在能自為之也。」「書日人〈隔韓論〉後」『毀園文録外編』233-234頁，上海書店出版社，2002年

8) 溝口雄三『中国の衝撃』240-241頁，東京大学出版会，2004年

結局、清朝後期に漢文で書かれたさまざまな漢訳洋書なども、日本人の西洋理解を早める便利な手段となっている。従来の蘭学やオランダ語は欧米で伝播された新しい知識に対応するには不十分だったからだ。漢文に造詣の深い日本の知識人は、中国で出版された漢訳洋書を直接読むことで西洋文明を吸収することができる。その中には17世紀以来のイエズス会士が残した『職方外紀』『坤輿図説』などの歴史、地理の著書だけでなく、19世紀以来のプロテスタント宣教師たちの『博物新編』『地理全志』『大美連邦志略』『万国公法』などの科学、政体、法律を紹介する著書や、さらに中国人の手による『海国図志』『瀛寰志略』なども含まれており、悉く日本に伝わり、復刻出版され、広く読まれるようになる。これらの書籍は同時代の日本人に大いなる知的刺激を与えた。ウィリアム（William Muirhead）の『地理全志』の安政六年（1859）の和刻本の序文において、塩谷宕陰は世界の知識を知る重要性を強調した。

今也夷欲罔_レ厭、海運日熟、彼之来者歳益多、而我亦将_レ有_レ事_二于四瀛_一焉、則文治武經不_レ得_レ不_三俱資_二於地志_一也。

また、この本を『海国図志』『瀛寰志略』と比較し、「然図志失_二於雜_一、志略主_二於事蹟_一、皆未_レ能_レ悉_二於方輿_一」と、前者はやや雑把で、後者は逆に歴史的事跡に偏り、いずれも地理を精通するには程遠いことを指摘した。そのため、『地理全志』に書かれている日本の状況は、「確かに間違いが多い」にもかかわらず、三日間閲覽して、五大州の大勢が分る。地理を知ろうとする者は、それを近道にしないわけにはいかない¹⁰⁾と説明した。

こうして中国経由の漢訳洋書の輸入時期は前後三十年ほどで、百種類以上に達し、天文、地理、医学、化学、政治体制などの各分野に及んでいる。このように漢訳洋書を体系的に導入することで、加えて英華字典など中国

9) 渡辺浩『東アジアの王権と思想』182頁、東京大学出版会、1997年

10) 「瀏覧三日、略足以瞭_二五州之大勢_一、則講_二地理_一者、安得_レ不_三以_二此為_一捷徑_一焉哉！」塩谷宕陰「〈地理全志〉序」『地理全志』、山城屋佐兵衛、1859年

の漢文文献を通じて西洋文明を吸収するパイプを構築している。

自作の漢文書のほか、江戸から明治期の和文書籍の序跋も漢文で書かれることが多い。そして、多少漢文の基礎がある人は、あえて漢文で書いてしまうことが増えてくる。例えば、服部誠一が文明開化のさなかにあった東京の風俗を描いた『東京新繁昌記』（1874）は、その文体と形式が江戸時代の寺門静軒作『江戸繁盛記』（1831）を踏襲しており、いわゆる純漢文からややずれた変体漢文であったので、日本の一般的な読者に受け入れられやすいことで好評を博した。当時福沢諭吉の『西洋事情』『世界国尽』に並ぶ、一万数千部のベストセラーとなっただけでなく、その後の一連の漢文体「～繁昌記」ものの誕生に火つけ役を果たした。同じ著者による週刊誌『東京新誌』（1876）も発行している。やはり漢文を主とし、仮名交り文の戯文や、著名人の艶聞や政治への諷刺批評などを縦横して、当時としては大きな発行部数を得た。それに続く同様の内容の『吾妻新誌』も発行したが、明治二十年頃にはそうした漢文を盛り込んだ雑誌がだんだん下火になってしまった。

この一連の漢文の吸収と創作を通じて、明治維新以降、漢文の素養を持つ日本の知識人はすでに一定の規模を備えており、彼らはオランダ語、フランス語だけでなく、ドイツ語、英語から直接西洋近代文明を漢文に翻訳し、新しい概念に対応するための新語を創造するなど、漢文著書を新知識の媒体にし、東アジアでの流通を実現させた。

3. 歴史書への重視

歴史書への重視は、中国だけでなく、日本の近世以来の大きな特徴とも言えよう。丸山真男は日中儒学の異同を論じる時、歴史を重んじるのは日本的儒学の特徴で、明治二十年までの翻訳も歴史書が多いと言う¹¹⁾。当時

11) 丸山真男・加藤周一『翻訳と日本の近代』63-70 頁、岩波新書、1998 年

の日本人は中国の正史や野史を読むだけでなく、各藩校でも歴史書を教材にした教育が流行した。たとえば『十八史略』は「日本には室町時代後期に伝来し江戸時代には大流行し、慶安元年(1648)の立斎先生標題解注音釈本をはじめ十種以上の版本がある。明治以降も中国史の教科書、漢文の教本として愛用され、今日まで最も普及した中国史書といってよい」とされている¹²⁾。その中の一つである『標注十八史略』(東崖堂藏, 1883)の序文に、川田瓮江が次のように書いている。「今上中興、更張学制、置文部省、開史館。府県又有大中小学之設、生徒講習、業分數科。而史学入門、大抵自『十八史略』始」と、学校教育において完全に歴史入門書と見なしていた。また近世漢文の代表格とされる頼山陽の『日本外史』(1836-37)は「幕末を経て明治初年に至るまで、非常に流行した。そのことは版本の多様さでも知られ、木活字(少なくとも五種)・川越版(十四回改刻)・頼氏正本(四系列、各系列それぞれ一再ならず改刻)・唐本(三種)など枚挙に暇がない」¹³⁾と、同じように当時のもっとも流行した歴史書として注目されるだけでなく、後の日本近代文学の叙述形式にも影響を及ぼした¹⁴⁾。

西洋史への関心は、前述の宇野哲人の序文に出てくる箕作紫川(阮甫)に始まると言っても過言ではない。嘉永三年(1850)ごろには、阮甫はすでに西洋史研究のサークルを作り、しばしば自家で研究・議論したと伝えられている。刊行されることはなかったが、偉人の伝記を集めた『西史外伝』や『大西史影』『大西大事策』『大西春秋』など、ヨーロッパの歴史を翻訳した原稿を数多く残したという。中には漢文で訳されたものもあった。系統的な西洋史の叙述としては、嘉永四年刊行の『八紘通誌』(1851)が挙げられる。ゆえに大槻磐水の子息である大槻磐彦は、「誰訳西史継前賢、中興人推箕紫川」と、阮甫の西洋史研究の開拓者たる業績を墓誌

12) 池田温執筆「十八史略」『国史大辞典』7巻, 297頁, 吉川弘文館, 1986年

13) 頼惟勤執筆「日本外史」『国史大辞典』11巻, 118頁, 吉川弘文館, 1990年

14) 前田愛「日本語への探索(9) 頼山陽『日本外史』の文体と試み」『国語通信』170, 29-32頁, 1975年

銘で褒めたたえた。明治三年(1870)になってようやく村上英俊(1811-1890)によって漢訳されたのはヨーロッパ通史の概説書『西洋史記』であり、底本はフランス人駝儒屨(Jacques Louis Daniel, 1794-1862)の編年体世界史概論 *Abrégé chronologique de l'histoire universelle* (1865) である。村上は自叙に史書の重要性を「可謂国家大典也」と言い、さらに編訳の理由を次のように挙げている。

皇朝有古事記, 日本史, 国史略, 日本外史等全備焉。漢土有春秋, 左傳, 史記, 漢書及歷代史, 以盡其詳矣。然至万国史記, 未有其全備者。故有志之士, 不能見西洋諸国歷代之事跡。因余訳佛蘭西人著述万国史, 名曰西洋史記, 聊補其缺。後進閱此書, 少可足窺西洋諸国上自天地開辟下至近世之事跡大略。¹⁵⁾

とあり、国史書と中国史書はあったものの、この訳書をもって西洋史の空白を埋めるような役割を果たすことを強調した。

『西洋史記』の序文に使われた「万国史記」は世界史を指しており、この言い方はやがて書名にそのまま用いられるようになった。明治十二年(1879)に出版された岡本監輔の『万国史記』である。岡千仞の序文にその本が「輯和漢近人訳書数十部, 撰万国史数十万言」とある。これは、中国の出版物が日本で「和刻」され、日本の学者にも影響を与えていることを意味する。つまりこの『万国史記』を徐繼畬の『瀛環志略』と照らし合わせると、ヨーロッパの沿革に対する叙述は、ほとんど徐氏の文章を写しており、区別はただ『万国史記』の冒頭は「上古」から始まっているのに対して、徐繼畬のものは依然として中国の朝代紀年を用いているだけである。たしかに『万国史記』凡例にも「此篇就翻譯諸書摘録其要, 欲使蒙士博通万国事迹, 民情風俗。其文雖用漢字, 其体反仿泰西史例」のように、漢文体でありながら、記述としていわゆる「其体反仿泰西史例」のように

15) 『西洋史記 上古史』巻一「自叙」2頁, 達理堂藏版, 1871年

西洋の歴史的区分を使っていて、東洋の歴史をも西洋史の枠組みに取り入れて再認識させている。さらに岡千仞の序文に曰く、西洋史は上古、中古、近古と分けられることで、「古今明暗の別を明らかにする」だけでなく、同時にこのような「世運歳進」も、万国の常態であり、「地球と終始するものである」という。それに比べれば、「東洋の国俗は、古を是とし今を非とす、時事を語れば世運が日増しに落ち、人道を論じれば風俗は古なくなるといふ。その進取を求めぬ態度は、西洋の中古の宗法が弊害となる時と少し似ている」と指摘している¹⁶⁾。

漢文体の『万国史記』は、文章が流暢で、日本で広く読まれているだけでなく、朝鮮半島でも経玄采による改編の『万国史記』が出されていた。「経国之大業、不朽之盛事」と冒頭に掲げた清国公使何如璋の賛辞も手伝って、中国ではもちろん複数の版で流通しており、一説では30万部も流布したという。王韜はこの書について「広く資料が収集されており、泰西の歴史や古典を志す者は、見ずにはいられない。これはきっと後世に伝わる名著であり、不朽の大事業でもある。況や日本は近年洋学を尊び、この本を得てその真実と虚偽を著せば、とりわけ有用である」¹⁷⁾と大いに賞賛していた。黄遵憲は岡千仞との筆談の際、『万国史記』についても、「我が国では『瀛環志略』を除いて、西洋の事を述べる書籍が少ないので、喜んで復刻版を出す」と述べた¹⁸⁾。その「評〈万国史記序〉」なる一文は、「漢文で書かれた欧米史は数多く編集されたが、この本を嚆矢とする」¹⁹⁾。その後、「万国」を冠した世界史の書名が急増したこともこれと関連するのであろう。

たしかに、本稿の冒頭に挙げた宋恕の言葉のように、日清戦争の敗北によってすでに見識ある中国人をしてどこに向かうべきかを知らせしめた。

16) 岡本監輔撰、中村正直校閲『万国史記』、申報館、1880年

17) 王韜『扶桑遊記』、453頁、嶽麓書社、1985年

18) 劉雨珍編校『清代首屆駐日公使館員筆談資料彙編』下冊、639頁、天津人民出版社、2010年

19) 陳錚編『黄遵憲全集』上冊、246頁、中華書局、2005年

そうした知識人の読書需要に応えるように、『万国史記』は必読書の一つであった。「清朝末期からのいわゆる啓蒙運動について取り上げるとき、往々にして一つの重要な源——世界史教科書——を忘れがちである。実際には、世界を知るリソースの非常に限られた時代では、歴史教科書の提供する種々の知識は人々の思考にまるで天窓を開けたように光が差し込み、そこからの模倣、受容、または自身の歴史および文化を批評するための最も重要な材料となっている。日本人岡本監輔の『万国史記』、ティモシー（Timothy Richard, 1845-1919）が翻訳した『泰西新史攬要』などの書籍は明らかにいくつかの未知でかつ先進国の歴史を提供してくれた。よって、人々が思考し、現実を批判する際に最も具体的な根拠を提供してくれた。1880年代以来、中国に現れた政治的な論評や論説書にはこうした世界史教科書の影が見え隠れするわけである。たとえば、宋恕の場合、非常に鋭い議論の多くは岡本監輔の『万国史記』からインスピレーションを得ている」と近代史家の王汎森が言う²⁰⁾。たしかに友人への手紙の中で、宋恕は『万国史記』について「詳しく見ないではいけない。そして、友人や門下生に広く読むように勧めるべきだ」と言い、なぜなら「この本は地球万国の古今政教の源流について言ったことは極めて道理があり、我が国の人はできない」からだ²¹⁾。近代の有名な孫宝瑄、唐才常、劉師培も『万国史記』を非常に重視し、清末に出版された各種の西学資料集成の中で、『万国史記』が様々な形で収められているのである²²⁾。

4. 中国向けの出版事業

日中交流史を見ると、明治四年（1871）の「日清修好条規」が締結された後、明治十一年（1878）に清公使館が設置されたことで、双方の文化交

20) 王汎森「歴史教科書と歴史記憶」『思想』第9期、2008.5

21) 宋恕「致貴翰香書」1895年7月、胡珠生編『宋恕集』上冊、533-535頁

22) 章清「晚清西学「彙編」與本土回応」『復旦大学学报』2009年第6期

流が大いに推進された。これは明治以降の日本漢学にも新たな刺激を与え、文人の間で漢文を通じた交流が深まり、日清戦争までは空前の盛況だったとも言える。岡千仞は黄遵憲の『日本雑事詩』のために書いた跋文の中で、黄が日本の知識を吸収する態度を次のように称賛した。

君の器量は宏遠で、言笑を好まず、特に我が国の風俗・政治・治乱の沿革を心がけている。『六国史』『日本史』はもちろんのこと、近世の諸儒の著書をも、何度も読破し、その源流をことごとく突き止めようとした²³⁾。

中村敬宇を中心とした同人社も明治九年から『同人社文学雑誌』を発行し、翻訳作品を多く載せて近代知識の伝播に努めている。欧米の言語から訳されたものもあれば、在華宣教師たちの著書（漢文、英文）から訳されたものもある。そしてそれらを主として和文に翻訳していたが、英詩や西諺・格言や西洋著名人の伝記などを漢文に訳したものも多かった。執筆者は同人社メンバーを中心とした中島雄、安藤勝任、信夫恕軒、吾妻兵治、大野太衛のほか、東京大学関係者の井上哲次郎、重野安繹や、その他の津田仙、柳田信大、西村茂樹、栗本鋤雲、副島種臣、末松謙澄、東条世三などが挙げられる。また漢学者の大槻盤溪、岡千仞、岡本監輔、内藤耻叟、三島中洲、亀谷省軒、森春涛、広部精なども寄稿している。

そしてこの雑誌は日中文化人の交流の場ともなっている。漢詩・漢文を通して在東京の中国人（王漆園）、清国公使館員（何如璋、張斯桂、黄遵憲、黎庶昌、姚文棟、陳允頤）、また朝鮮人（兪吉濬、尹致昊）などとの交流の輪を形成している。その交流の実態がこの『同人社文学雑誌』に多く反映されているにもかかわらず、いままで見過ごされたものも少なくない。たとえば、当時清国公使館員の黄遵憲の未収録の文章をその中から見つけるこ

23) 「君器識宏遠、不妄言笑、尤用心我邦風俗政治治乱沿革之跡。無論『六国史』『日本史』、近世諸儒所撰著、一再涉獵、皆盡其源委。」、陳捷『人物往來與書籍流轉』、102頁、中華書局、2012年

とができる。他にも日中学者間の交流関係を通じて、章炳麟の未収録の序文も発見することができる²⁴⁾。

こうした和文・漢文を両立させた『同人社文学雑誌』に対し、同年創刊された岡本監輔編集の『東洋新報』(1876-1878)はすべて漢文を採用し、同誌の「凡例」はこれについて中国人も巻き込んで「アジア内の同好の士と共に」「内外の情勢を察して、当代の時務を知ってもらうため」と説明している。『東洋新報』は主に「内報」「外報」「論説」「文苑雜識」の四つの欄に基づいて各方面の情報を集め、「外報」の情報源は、中国の『申報』と『万国公報』からの文章が少なくない。逆に『万国公報』にも『東洋新報』からの文章が転載されている。そのため、「漢文」を媒介とする『東洋新報』も、東アジア文化交流のプラットフォームを構築している。中国の役人、知識人の詩文は同誌に多く掲載されている。その作者には上述の漢学者だけでなく、「脱亜入欧」を主張すると批判された福沢諭吉でさえ、『東洋新報』第35号に漢文で「論支那通交之益」(1878)を発表し、交易において「我が国を富強にするには、支那の事情を知らなければならない」と指摘し、日本は「欧米の方法をまねて、支那語を学び、支那書を読み、学生をその地について勉強させ、教師を迎えて各大学区に支那語学校を設置し、支那の情勢を世間に知らせることができればよからうか」と主張している。これは福沢の初期のアジア主義思想である「アジア連帯論」を研究するための重要な手がかりでもある。

総じてみれば、日清戦争までは漢文の読み書きのできる日本の知識人は相当数に上るものだったと言えよう。そのため、日中の近代新知識は「同文」を通じて相互に交流することができた。王韜の『普法戦紀』が日本で和刻され広く読まれ、国際情勢を知る重要な根拠となったのに対して、岡千仞の『米利堅志』『法蘭西志』は中国に伝わり、各地に多くの復刻版が

24) 陳力衛「章炳麟与日本汉学界的不解之缘」『章太炎研究』(第一輯), 上海人民出版社, 2023年11月

ある。梁啓超が1896年に出版した『西学書目表』には、岡本監輔の『万国史記』（上海版）と岡千仞の『米利堅志』（日本版）を収録している。さらに中江兆民が漢訳したルソー（Jean-Jacques Rousseau）の『民約訳解』（1882）も、近代中国で広く読まれているため、西洋の近代思想を宣伝するために積極的な役割を果たしている。このような日本漢文書籍は、訓点などを取り除けばそのまま中国で刊行をすることができ、いち早く新知識を導入できる便利さを持っている。先に挙げた『西洋史記』の中国語版も、同じように『西洋通史前編』と改名され、光緒二十八年（1902）に上洋会文訳書社から出版された。

しかし、日本において全面的に西洋への傾倒が進むにつれて、漢文書籍や雑誌などの発行は徐々に下り坂になり始めた。日清戦争の後、日本は「アジア主義」の旗を掲げて、中国に対して活動を展開し、前述の『万国史記』などの販売が大成功だったのを受けて、中国は新たな書籍販売市場として浮上してきた。いわゆる「アジア主義」の芽生えは、上記の中村敬字をはじめとする日中韓の人々の接触と交流に端を発しているとも言えよう。例えば積極的に対中翻訳事業を推進しているのは同人社メンバーの岡本監輔、吾妻兵治、重野安繹、井上哲次郎などである。

たとえば、善隣協会の対中翻訳事業もそうした背景のもとで展開された。『清議報』第2巻（1899年1月2日付）には、1898年11月に岡本監輔が執筆した『善隣協会主旨』が掲載されている。「日本の経験を提供して隣国を支援しようと、株式会社善隣訳書館を設立した」というのは、「支那の維新の芽がすでに生えはじめている……まずは我が国の新しい書物を普及させて彼の知見を開く」からだ。これは、つまり「日本では維新後、外国書によって「国民の脳力」が左右された」ことから、同じ方法をもって清国に普及させるつもりである。「わが館の新書が普及した日は、空文虚礼を取り除き、新知実学を鼓吹する時だ」と強調している。清国の督撫道台なども、「わが館の美挙を絶賛する」のだろうと言った。善隣訳書館による

漢訳『大日本維新史』（重野安綱）、『国家学』（吾妻兵治）などが中国で出版・発行され、ベストセラーとなっている。狭間直樹は善隣訳書館の設立について、「興亜のための言語的結集軸を追求するこのような文化的実践を経てきた岡本監輔や吾妻兵治は、十数年後といくらか間隔があくが、清韓両国の改革に意味のある書籍を東アジアの共通言語としての漢文訳書形で提供するための機構、善隣訳書館の設立を構想するにいたるのである。」と指摘した²⁵⁾。

もちろん、このような開拓的な仕事を具体的に実施するのは難しい。まず、中国で書籍販売を行う上で直面している問題の一つは、著作権法が制定されていないことであり、参入してきた日本人は、復刻禁止を厳令してこそ、相互の利益が生じると主張している。内藤湖南が書いた旅行記『燕山楚水 支那漫遊』（1900）には中国人蔣国亮との対話があり、その辺の事情を知ることができよう。

蔣：貴国書籍翻して中文と作すは此れ大に有益な事。既に以て支那の文明を開くべくして、而して貴国又其の利を得ん。近日の『万国史記』『支那通史』のごとく、中国人が此書を買ふ者甚だ多し。惜しむらくは、此類の書訳出する者甚だ少き耳。故に弟甚だ貴国人が多く東文書を訳せんことを願ふ。貴国維新時の史、及びに学堂の善本のごとき、猶ほ益ありと為す。君、以て然りと為すや否や。

内藤：現に設けて善隣訳書館あり。吾妻某氏、岡本監輔翁等と、方さに翻訳に従事す。聞く貴国李星使も亦頗る此事を賛すと。但だ弊邦人刻苦翻訳する所、滬上書肆、輒ち翻刻售出せば、則ち邦人精力、徒らに射利の徒の攘むる所の為らん。又貴国官司厳査を要す。貴邦石印書籍、価極めて廉、弊邦の敵する所に非ざる也。『万国史

25) 狭間直樹「日本的亞細亞主義與善隣譯書館」『近代中国與世界』第二卷，社会科学文献出版社，7-8 頁，2003 年

記』、即ち岡本翁の著、『支那通史』は那珂通世氏の著。二君僕皆之を識る。岡本嘗て貴国に遊び、闕里先聖の址を訪ふ。那珂は即ち僕か郷先輩なり。²⁶⁾

ただ、不幸なことに、岡本監輔とともに善隣訳書館を創設した中村敬宇の学生吾妻兵治は、中国で兵乱に遭い、事業が阻まれ、帰国してきたため、かえって借金を抱え、失意のうちに亡くなった。

しかし、この翻訳ブームの中で、失敗にめげずに、後続したのは伊沢修二が主宰した泰東同文局である。『日本学制大綱』『万国地理教課本』『五大洲志』『教育学』などの書籍が出版されている。さらに井上哲次郎が会長を務めた普通学講習会（富山房、東亜公司などの出版社を後ろ盾に）も相次いで成立され、『最新生理学及衛生学』『物理学課本』『（清国家庭及学堂用）家政学』『教師論』『最新電気学』『家畜飼養各論』『養蚕論』などの「実学」書が漢訳出版された。「普通学講習会創立趣旨」（1907）によると、

今の世界で最も重要なのは学ぶことである。世界は日進月歩で変わりやすく、学問も日増しに新しくなり窮まるところなし……中国は古来の大国で、文物典章は、歴史に燦然と輝いている。近年は弱肉強食で競い合っている中、旧を守ることは無益であり、知識の更新が必須で、世界の現今の学問が必要とされていると知る……それ日本と中国は、唇齒輔車の関係にあり、古くから交誼している。われらがむかし学んだ学問は中国から来ており、そして今新しい学問をもって中国へ報いるのは、まさに今時である。よって我が国の有名な学者を招いて、基礎学問全科を講義して、漢文に訳して、「漢文普通学講義録」と言う。平易な書き方で、深遠な理を説明したり、図解を加えたり、質問に答えたり……²⁷⁾。

その趣旨は『清議報』に掲載された「善隣協会主旨」とほぼ同じである

26) 内藤湖南『燕山楚水：支那漫遊』90-91頁、博文館、1900年

27) 吳秀三『最新生理学及衛生学』附録2頁、富山房、1907年

が、同時代に在日する中国人留学生をも対象としている点が異なる。これらの漢訳書は百種を超え、科举制度廃止後に積極的に新式学校を普及させる中国にとって、最も必要な新知識であり、新式教育に使用される基礎教科書でもあった。

この時期に展開された翻訳活動、および各種漢文資料の伝わる範囲を明らかにすることは、日本の近代化過程を理解するために具体的な証拠を見つけることができる。それだけでなく、近代中国の知識人がどのように日本を通じて新しい知識を吸収する近道を得て、各学科の知識の紹介と新しい教育の推進を行ったのかを把握するために重要である。翻訳史の角度から見ると、近代知識の発生は、もちろん翻訳を通じて行わなければならない。その際、東アジア諸国にとって、漢文に訳すほうがより流通しやすいに違いない。これらの日本人が翻訳した書籍は、西洋語からだけでなく、日本語からも年々増えていったため、これらの訳著はおのずと翻訳史研究の重要な資源を構成することとなった。つまり近代啓蒙期に見られる西洋の最新の学問を紹介したことは、思想や知識のほか、その新概念の媒介である新漢語の生成と伝播の役割を考察するにも好都合であった。しかし、現状においては、訳者の選定と中国の読者の評価、特にこれら書籍のテーマと翻訳過程に関する研究がまだ十分に重視されていないため、研究に値する問題が豊富にある。

日清戦争後、アジア諸国、特に中国と朝鮮は、日本を手本にするように大量の留学生を日本に派遣しはじめた。「広訳日書」の呼びかけのもと、彼らは直接日本語を翻訳することで近代知識を吸収し、上述の日本人が担ってきた大部分の仕事に取って代わった。日本の近代漢籍の減少に伴って、直接日本語から百科辞典及び各学科の専門知識を翻訳して受け入れることは、中国に近代新式教育を推進させるために、ますます重要になったのである。むろん、日本人が漢訳で紹介した洋学の知識であれ、中国の知識人が日本というルートを通じて翻訳紹介した「東学」または「新学」で

あれ、近代日中文化交流を理解する上でも、「西学東漸」をよりよく把握する上でも欠くことのできないものとなっている。

5. 中国における「東学」の確立

中国に「東学」という名称の出現は画期的なもので、いわば清朝廷の「採西学」という方針の転換を意味する。1898年、康有為はある上奏文で、「日本と我が国は同文であり、その維新は今まで三十年にわたり、欧米の政治、文学、軍事に関する新知識の優れた本は、すべて訳されている」から、しかも「日本の書物には我が国の文字を八割使っているので、それを訳すのに苦労が少なく、日数も多くはかからない」と進言した。それで、康有為は北京に訳書局の設立を提案し、「責任者を選んでその事業を統率し、その指導のもとで専門家を招いて、専ら日本の政治関係書物の佳作を選び、分類し逐次に翻訳し、年月が経たないうちに、日本の良い書籍は大抵完訳することができる」と主張している²⁸⁾。張之洞の『勸学篇』でも、「西洋書物は非常に繁雑で、凡そその重要でないものは、日本人はすでに削除または吟味し改訳していたので、中国は日本と国情・風俗が近く、真似しやすく、まさに労少なくして功は多し、これに勝ることはない」と述べている²⁹⁾。梁啓超は日本に亡命した後、さらに「日本は維新以来三十年、世界に弘く智識を求めて、翻訳・著述した有用の書物は数千種を下らない。とりわけ政治学・「資生学」（理財学のこと。日本では経済学と云ふ）・「智学」（日本では哲学と云ふ）・「群学」（日本では社会学と云ふ）などに詳しい。いづれも国民の智能を開き、国家の基盤を強める急務である。」と言っている³⁰⁾。清末に出版された新知識の叢書は、「西学の手引き」として種々のテキスト

28) 康有為「請広訳日本書派遊学折」1898年6月1日、姜義華、張栄華編校『康有為全集』第4集、67-68頁、中国人民大学出版社、2007年

29) 張之洞『勸学篇・遊学第二』、苑書義等主編『張之洞全集』第12冊、9738頁、河北人民出版社、1998年

30) 梁啓超「論学日本文之益」『清議報』第10冊、1899年4月1日

トを提示することを目的としているが、その変遷史も興味深い。最初に出版された西学関係の図書目録には、日本からの論著がまだ少ない。前述の梁啓超が1896年に出版した『西学書目表』には、日本の著書が三冊しか収録されていない。その後出版された資料は、「西学」以外にも「東学」の言い方が見えはじめ、「西学書」も段々と「東西学書」に変わり、19世紀末から20世紀初めにかけて、次第に日本は中国が新知識を摂取する重要な国になってきた。1897年に出版された沈桐生撰『東西学書録総述』は、比較的早く「東西学」を書名に使った著書に数えられる。二年後の1899年に徐維則が編纂した『東西学書録』は、特に日本書の翻訳の重要性に言及した。「日本は泰西に倣い、通俗教育を行い、その書籍は整っている。最近各省には学堂が林立し、多くは幼学を教え、日本の小学校の諸書を殆ど翻訳し、その購入も自由に任せることで、古い慣習を一掃してしまいうことができる。その効果は素速く、教え方も大抵同じである」とある。そして、「日本は西学を重んじ、年ごとに精進し、東西文明に通ずる専門家を招聘し、諸書を翻訳させ、その費用は比較的に安かったので、各省の書局はこぞってこれを模倣して出版した」と指摘した³¹⁾。この本は顧燮光によってさらに増補し、『増版東西学書録』と改名し、日本からの著書もより多く収録された。また「新学」という名で編纂された様々な資料も、主に日本から取り集められ、最も代表的なのは1903年に出版された『新学大叢書』である。清末の大学者俞樾はこの叢書に対して『富強叢書』『時務通考』などの類書と比較して、次のように称賛した。

日本は五つの島に位置し、面積が狭くて小さいが、明治維新から30年余り、西法を重んじ、その書籍を翻訳し、以って試験に資してきたので、今日は文明の列に伍されている。対して、わが中国は地が広く物産豊かなのに、それには及ばない。³²⁾

31) 徐維則「例目」『東西学書録』、署「光緒二十五年三月局印」、1-2頁

32) 俞樾「序」、明夷編『新学大叢書』、1頁、上海積山喬記書局、1903年

特に際立っているのは、清朝末期の新しい教育のための下準備や計画を立てる際に、日本が発揮した重要な役割も具体的に示されていることだ。陶行知の「中国における新学制建設の歴史」には新学制の成立のプロセスを次のように描き出している

〔光緒〕二十四年の学堂章程には、日本教育の勢力はまだ侵入していない。しかし、日本の強いところは、やはり注意しないわけにはいかない。次第に日本を視察する人が出てくる。日本は中国に近く、日本に倣うのも自然な傾向だ。その後、1900年の義和団事件の失敗に刺激されて、更に教育を興すことが救国の要で、少しも遅らせてはならないと感じた。しかし学制を制定するには、もちろん各国の成法を参考にしなければならない。日本の学制は、その時の国情と文字の関係からみれば、最も模倣しやすいもので、光緒二十八年の学制は、特に日本の学制の影響を受けている。張百熙の上奏文は、各国の学制を参考にしたとは言ったものの、日本を除いて、彼がその時の各国の学制について言ったことはまったく根拠がない。翌二十九年の学制は、さらに日本の学制を丸ごと写しており、七回も改正したが、最後まで独自の精神が少なかったと言えよう。³³⁾

実際、これは清末の朝野上下が自発的に選んだ結果だった。日本視察を経た繆荃孫はその転換の経緯を白状した。「今は積弊の世、それを直す方法は、人に学ぶことにほかならない」、「ここ数十年、泰西に見習ってきたが、日本に視察してみたら、我が国と同文で境を接し、維新を経て自強し、旧を捨て新に改める道のりはまだ辿れるものだから、いま日本へ渡航する人が増え、さまざまな視察記録と報告書が日増しに出てくる」³⁴⁾とある。その中で触れた、記録を残した羅振玉、李宗棠、閔穎人、陶渠林、呉汝綸

33) 陶行知「中国建設新学制的歴史」『新教育』第4巻第2期、1922年1月

34) 繆荃孫「自序」『日遊彙編』、鐘叔河主編『走向世界叢書』、5-6頁、嶽麓書社、2016年

らは、すなわち国の派遣によって、日本に渡って教育を視察している。各級官吏が日本の経験を重視するのも、学校運営が直面している具体的な困難を解決しようとするからだ。たとえば、繆荃孫の日本への渡航前に、張之洞が繰り返し念を押したのは「他国に学び、固より我が国の見習うべきところを探り、特に真っ先に我が国が現在見習うことのできるところを採取すること。奇を好むのではなく、躊躇せず、順を追って基礎から仕上げていけば、有益なことではなかろうか」ということだった³⁵⁾。

日本の各級学制の配置と、特に各科目の教科書に注意を払っていたように、張百熙への電文の中で、張之洞は教科書の編纂に際し日本の経験は参考に値すると表明した。「諸々のご判断に任せるが、初めのうちその方法を少し広くとってもよい」、「他の省の編纂書でも審査後に使用許可」³⁶⁾とした。これに先立ち、張之洞は羅振玉に電報で、日本に赴き、教科書の面に多く留意するようにと伝え、「これは教育の根幹で、極めて重要である。着手するのは難しいが、日本に直接行ってこの目で選定するほかない。単に購入してきた本を頼りに模倣することではだめだ」³⁷⁾と指示した。張之洞が羅振玉を選んだのは、羅振玉が早くから適切な教科書をどのように編纂するかに注目していたからだ。1901年5月に羅振玉が上海で創刊した『教育世界』では、教育振興について、学部設置、学制策定、等級分けなどの主張をしたほか、特に「書籍編集」について、「学校が設立され、学科が分かれば、そこで教科書を準備しなければならない」、「学部には編集局を設置し、フォーマットを定め、天下の有能の士を招き、小学校、中学校などの教科書を編纂させる」と述べた。³⁸⁾日本で教育視察している間、羅振玉はさらにこれに対する見解をつぎのように述べた。「学科は既定すれば、

35) 同上

36) 張之洞「致京張冶秋尚書」1902年3月23日、苑書義等主編『張之洞全集』第8冊、8751-8752頁、河北人民出版社、1998年

37) 同上、8642頁

38) 羅振玉「教育私議」『教育世界』第1号、1901年5月

それに合わせる教科書を編訳することができる。つまり師範用書、教科書、参考書の3種類に分けて、朝野の力を合わせて、常に東西各国の新しく出た本を、随時に訳し出して、次第に旧教科書を改良して、応用に資する」³⁹⁾。この時、羅振玉が企画したのは、やはり「東西各国」の教科書を手本としたもので、後でこの点に言及すると、「殆ど日本の教科書をモデルにしている」と強調した⁴⁰⁾。これについて蔡元培も次のように伝えている。

この雑誌に翻訳された各教科書は、日本から多く採用されている。各種の教科書を検討すると、通用可能なもの（動、植、理、化など）があり、特撰すべきもの（読本、地理、歴史など）がある。ここに日本の教科書を原本として翻訳し、国内の学者がこれに基づいて中国に適する教科書として編纂されれば幸いである。⁴¹⁾

上記の日本からの教科書は、もともとすべて漢文で書かれているのではなく、清末の中国人が日本語から訳したものもある。いずれにしても、京師大学堂が1902年に刊行した「暫定各学堂応用書目」を見ると、過渡期の教材の範囲は非常に広く、日本の教科書を大量に採用したのが顕著な特徴である。しかも、日本人が中国語で書いたり翻訳したりしたものの影響はさらに広いのである。那珂通世の『支那通史』と桑原鷺蔵の『中等東洋史』は、中国の歴史を再認識させるには、強いインパクトを与えたものである。前者は漢文で書かれているため、影響はより直接的であり、後者は複数の翻訳本が流通していたので⁴²⁾、中国人の歴史観にも影響を及ぼしている。たとえば、明治期の知識人にとって「文明（開化）／野蛮」「進歩／停滞」という文明史観が呈する二元論的認識は、日本が欧米を手本と

39) 羅振玉「教育贅言八則」『教育世界』第21号、1902年3月

40) 羅振玉「学制私議」『教育世界』第24号、1902年4月

41) 王世儒編『蔡元培日記』（上）1901年5月14日、169頁、北京大学出版社、2010年

42) 周予同「五十年來中国之新史学」、朱維錚編『周予同經學史論著選集』、535-536頁、上海人民出版社、1996年

する「文明開化」を確定する指針としてのみならず、中国を再認識する座標軸ともなっていることを従来の研究が明らかにした。いわゆる「支那史」は、「まさに欧州文明史の教科書の影響で中国の歴史を書き直したものだ」⁴³⁾と言えよう。

6. 終わりに

近代日本に残された漢文著書が豊富で、網羅することは困難であるため、『近代日本漢文文献叢刊』第二輯は日本の漢文小説や中国見聞記などをはじめ、近代以降の日本知識人の漢文作品の中から代表的なものを選んで編集したい。たとえば重野成斎、川田甕江、島田重礼、鈴木虎雄などの漢学者、小栗栖香頂のような仏教徒、さらに洋学への開眼を経た西周、中村正直、井上哲次郎や、中国の近代化に直接かかわっていた有賀長雄、服部宇之吉、白岩龍平、佐倉孫三などを取り上げる予定である。

日本で生まれたこれらの漢文文献を整理することによって、当時の日本の学術や思想の変遷を観察するだけでなく、日中間の文化、知識、用語、概念の相互影響を理解することができる。言い換えれば、これは日本の「近代性」のプロセスを把握する資料であると同時に、近代中国の「西学」から「東学」または「新学」への「転換の時代」における中国の思想家たちの成長を裏付ける「知の倉庫」でもある。いわば新知識の採集が、どのように転換し、またどのような影響を受けていたかを知ることができよう。

中国の知識人にとって漢文資料は最も直接的な伝播媒体であり、漢文で訳されるこれらの書物は同時代、または後の時代の中国人にも読まれる可能性があったため、新概念を伴う漢語の中国語への逆輸入のもっとも直接的な媒体として研究すべきものと考えている。20世紀以降、西洋の概念と東アジアとの結合は言葉の翻訳によって実現され、その中で「新名詞」と

43) 黄東蘭「書写中国——明治時期日本支那史・東洋史教科書的中国叙述」, 黄東蘭主編『新史学』第4巻, 130頁, 中華書局, 2010年

「新概念」を創出していることも忘れてはならない。王国維が述べたように、「新しい思想の輸入は、すなわち新しい言葉の輸入を意味する」のである⁴⁴⁾。1913年に上海美華書館が出版した小冊子は、「新名詞」が「新概念」の紹介から生まれたということを直接伝えている⁴⁵⁾。ゆえに、語彙交流の歴史から見ると、こうした漢文資料を分析することも、特に重要である。

ただ残念なことに、日本近代語研究において痛感しているのはこうした漢文資料の欠落である。古来、和漢は表裏一体のものだったが、明治以降の国学意識の高揚とともに、和漢を相対化させたことで、漢文の位置づけが曖昧となってしまった。結果、学界で最も重視されている「日本古典文学大系」では、漢文文献の占める割合が極めて低く、そのために漢語の変化の全体像を描くことができなかった。現在利用できるいくつかの主要なデータベースにも、依然としてこの問題が残る。明治漢文があればほど隆盛だったにもかかわらず、「近代語コーパス」には明治期の近代雑誌が主に収録されているが、漢文資料はほとんど収録されていない。この不足を補うためには、近代日本の漢文資料を分類してデータベース化する必要がある。そうすることによって、日本人の新語の創造と改造の努力を知ることができるだけでなく、日本を通じて間接的にどのように西洋の知識を吸収したのか、そしてそれによる新語の中国やアジアの他の国への拡散、定型化の問題をも把握することができる。したがってこれらの漢文資料は語史・概念史を研究するために必須の資料群でもある。

参考文献

陳力衛『近代知の翻訳と伝播』三省堂、2019年6月

陳力衛「日本人の手による漢訳洋書—村上英俊訳『西洋史記』について—」『歴史言語学の射程』沖森卓也編、三省堂、2018年11月

44) 王国維「論新学語之輸入」『教育世界』第96号、1905年4月

45) A. H. Mateer, *New Term for New Ideas: A Study of the Chinese Newspaper*, Shanghai: American Presbyterian Mission Press, 1913